桑都プロジェクト：
シュリーマン生誕200周年を記念して
―読書カフェ・学芸員インタビュー・学生選書・講演会・展示会―

伊藤　貴雄（編著）

はじめに　プロジェクト発足の経緯
1　読書カフェ（創価大学図書館とのコラボ）
2　ベルリン国立博物館群学芸員インタビュー
（東京富士美術館とのコラボ）
3　シュリーマン生誕200年記念学生選書
（くまざわ書店八王子店とのコラボ）
4　シュリーマン関連講演会（東京富士美術館とのコラボ）
5　展示「ドイツと八王子」（Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会とのコラボ）

はじめに　プロジェクト発足の経緯

2018年夏頃のことである。たまたま『シュリーマン旅行記　清国・日本』（石井和子訳・講談社学術文庫）を読んでシュリーマンの八王子訪問という史実に驚いた筆者（八王子市在住）は、同僚で地域活性化に詳しい西川ハンナ文学部准教授に、この史実にちなんだイベントがあると面白いのではと相談した。西川氏は早速八王子市内の商店街関係者を紹介して下さり、意見交換をすることができた。そのときは、数年後にシュリーマンの生誕200周年

が来るからそれを目標に少しずつ準備をしていこうという話でまとまったように記憶する。しかしその後筆者が授業の準備や専門の研究に追われて、なかなか具体的な活動に踏み出すことができなかった。しかも2020年春に新型コロナウィルス感染症の拡大で地域活動が非常に困難になった上、オンライン授業への対応から上記の話は完全に意識から遠のいてしまうこととなった。そして約一年が経とうとする2021年3月、西川氏から「コロナ禍でオンライン授業が続き、友達が作れず悩んでいる学生も多くいます。学生や街の人たちに希望になるような活動のテーマとしてシュリーマンはふさわしいと思いますが、いかがですか」との連絡をいただいた。シュリーマンの誕生日は1月6日なので、2021年度のうちに生誕200周年を迎えることになる。つまり、すぐにでも始めなければ機を逸してしまうことが判明した。急遽西川氏とプロジェクトを立案してメンバー募集文「なぜ、いま八王子でシュリーマンか？」[1]を作成し、本学で八王子学という科目を担当しておられる杉山由紀男副文学部長にプロジェクトの顧問をお願いした。先生方の賛同と協力も得て、4月中旬から学内で募集を始めた。以下が募集文の全文である。

なぜ、いま八王子でシュリーマンか？

シュリーマン（Heinrich Schliemann, 1822−1890）をご存じですか。

十数カ国語を操り、世界を舞台に活躍したビジネスマン。
40歳を過ぎて、全財産を古代ギリシャ発掘に注ぎ、**トロイ遺跡**を発見した考古学者。
世界史の授業や、偉人伝などで、その名を聞いた方も多いと思います。

このシュリーマン、発掘を始める前に世界を旅し、江戸時代の日本にも来ていました。
そして、なんと**八王子も訪れ**、「とくに興味深かった」と本に記してい

ます。
彼は、当時ヨーロッパでも有名だった**「絹」の生産地を一目見たかった**のです。

明年**2022年1月6日**、シュリーマンの**生誕200周年**を迎えます。
また今年2021年は、彼が古代ギリシャ遺跡発掘を開始して150周年に当たります。

この佳節を機に、**「桑都プロジェクト」（シュリーマン＠八王子）**を始動したいと思います。
ずばり、シュリーマンをテーマにした八王子の地域活性化です。

シュリーマンという人物の魅力。大きく三つあげることができます。

第1に、**不屈の精神力で夢を実現した力**。
正規の教育を受けていないのに、独学で語学をマスターし、考古学に革命を起こしました。
彼は述べています。「才能とは何よりも忍耐とエネルギーのことである」と。

第2に、**世界を結ぶコスモポリタン**。
ドイツに生まれ、オランダで修業し、ロシアで起業。アメリカ、中国、日本を旅したのち、フランスで学び、トルコで発掘し、ギリシャに住んで、イタリアで永眠。
彼の日本旅行記は、偏見のない目で異文化を記述したことで、今日高く評価されています。

第3に、**人生100年時代の模範として**。

平均寿命が今よりも短い時代に、40代半ばで一念発起。全く新しい後半生を歩みました。
そして生涯を通じ、学問の魅力を広く一般の市民に、青年たちに伝え続けました。

いま、これほど多角的な好奇心を満たす人物は他にいません。
シュリーマンに導かれ、**経済、歴史、文化、人生を深められるチャンスを「発掘」**したい。
シュリーマンの如く、酔狂だといわれても、この夢を追ってみませんか。

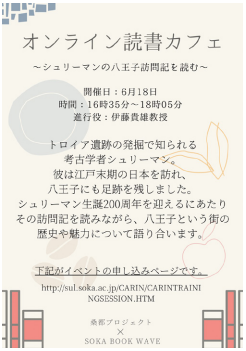
4月中に10数名の学生が参加を希望し、そのメンバーと西川氏・筆者でさまざまなイベント案を考えた。5月半ばには大学コンソーシアム八王子の助成事業に応募できるだけの原案がまとまった。6月末には40名近い学生がプロジェクトに所属することになった。

プロジェクト全体の概要については本誌掲載の西川氏による報告を参照されたい。以下では、プロジェクト学生チーム（以下、学生チーム）が主催ないし協力した一連の活動のうち、とくに筆者が監督として関わったものを時系列的に資料として報告する。すなわち読書カフェ、ベルリン国立博物館群学芸員インタビュー、シュリーマン関連講演会、シュリーマン生誕200年記念学生選書、展示「ドイツと八王子」の5つである。

1　読書カフェ（創価大学図書館とのコラボ）

2021年6月18日（金）16：40～18：05に、創価大学図書館SBW（Soka Book Wave＝全学読書運動）とのコラボで「読書カフェ～シュリーマンの八王子訪問記を読む～」を開催した（オンライン）。プロジェクトに参加してまもない学生や、関心を持っている学生に、シュリーマンの人生や彼と八王子と

の関係を知ってもらうために企画した。広報用チラシや当日の司会進行は学生チームが担当した。参加対象は学内学生だが、秋に開催予定の展示会でコラボする「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」（第５節参照）の方々もお招きした。



▲グループ・ディスカッションの様子

◀学生が作成した広報用チラシ

最初に創価大学図書館職員からSBWの説明があり、続いて筆者がシュリーマンの経歴や彼と八王子との関係についてミニレクチャーを行った。次に学生チームが『シュリーマン旅行記　清国・日本』から「八王子」の章を朗読した。全参加者（約20名）が５つのグループに分かれて、学生チームの進行のもと感想を語り合ったあと、全参加者を対象に質疑応答の時間を設けた。最後に学生チームが桑都プロジェクトについて趣旨や活動計画を紹介した。

以下は筆者によるミニレクチャーと、質疑応答の記録である。

【ミニレクチャー】

桑都プロジェクトの「桑都」は、「絹の都」という意味です。今回、文学部の教員と学生と一体となって八王子の街おこしをしようという趣旨で立ち上げました。今年は特にシュリーマンという人物に焦点を当てたイベントを計画しています。八王子とシュリーマンとどういう関係に

あるのか？　最初、私からその話をいたします。

シュリーマンという名前をご存じの方は多いと思います。古代ギリシャの「トロイ」遺跡を発掘した考古学者として知られています。また、創価大学では語学の勉強で成果を上げた学生さんに「シュリーマン賞」という賞を授与していますので、語学の好きな学生さんは名前を聞いたことがあることでしょう。

彼の『古代への情熱』（村田数之介訳、岩波文庫）という自伝があります。お読みになった方はおられますか？　はい、けっこうおられますね。これはヨーロッパでは有名なロングセラーの一つです。この本には、シュリーマンが「トロイ」をはじめ、古代ギリシャ文明の遺跡を発掘していった過程が詳しく書いてあります。

彼が発掘をするまで、当時のヨーロッパの学者の多くは、古代ギリシャのトロイ戦争を単なる伝説と思っていました。ところがシュリーマンはこの戦争を描いているホメーロスの叙事詩『イーリアス』を、本気で信じて発掘に挑戦しました。そして本当に古代の遺跡が出てきたので、考古学界にセンセーションを巻き起こします。

シュリーマンは正規の学校教育を受けていません。彼は家が貧しくて、若いときは徒弟として修業した苦労人なんですね。ドイツ生まれですが、オランダのアムステルダムで修行し、ビジネスマンとして活躍しました。ドイツでは、知識人のコースと実務家のコースとははっきり区別されているんですが、その人がヨーロッパの考古学の常識を180度ひっくり返す大発見したんです。それで、やっかみもあったと思いますが、学者たちから彼はかなりの批判や攻撃を受けました。しかし、時とともに、シュリーマンの発掘の意義が認められていきました。

ともかく発掘にはお金がかかります。シュリーマンはビジネスで築いた富を、40代以降発掘作業に注いでいきます。彼がビジネスで成功した際に武器になったのは、その語学力でした。自伝を読むと「時間を盗むように勉強した」と彼は言っています。その学習法はどのようなもの

だったか。これが今日シュリーマン・メソッドと言われているものです。モデル文（小説など）を音読して丸暗記し、覚えた文章を活用して自由作文を行い、それをネイティヴチェックによって修正してもらってまた丸暗記する、といういわゆるパターン・プラクティスです。この方法で彼はまず５～６カ国語、最終的には10数カ国語を身につけ、国際な商取引を一手に担って、当時のヨーロッパでも有数の富豪になりました。

ところで、彼はギリシャ発掘に乗り出す前に、世界旅行をしました。とくに1865年に清末の中国と、幕末の日本を訪れています。それが『シュリーマン旅行記　清国・日本』（講談社学術文庫・石井和子訳）という本になっています。これを見ると、目次が第一章「万里の長城」、第二章「北京から上海へ」、第三章「上海」、第四章「江戸上陸」、第五章「八王子」、第六章「江戸」、第七章「日本文明論」、第八章「太平洋」となっています。上海や江戸と一緒に並ぶという、そのぐらいの大きな位置づけを彼は八王子に与えました。なぜか。シュリーマンが見たかったのは絹の生産地、桑都としての八王子だったのです。

そのころ、ヨーロッパでは、絹を作る蚕の病気（微粒子病）が流行して、フランスやイタリアの絹産業が衰退していました。そこで日本の生糸がヨーロッパで大変重宝されるようになり、長野や群馬、埼玉といった関東甲信の生糸が八王子に集約され、横浜から海外に輸出されていきました。シュリーマンが来日したのは、ペリーが日本に来て横浜が開港した約10年後です。まだ外国人があちこちに行くと刀で切り殺される危険がありました。それで外国人は横浜から10里（40km）の範囲内しか動けませんでした。八王子は横浜からちょうど10里くらいの場所にあります。シュリーマンが絹の生産地を見たいと思ったときに最もふさわしい場所だったわけです。日本に着いてから２週間ほどして、もう八王子に来ています。シュリーマンが八王子旅行を決行した日は、1865年の６月18日。奇しくも今日と同じ日付ですね。行きと帰りに原町田（町田）で宿泊しての二泊三日の旅でした。

【質疑応答】

質問：シュリーマンは語学の達人だったそうですが、日本語もできたのでしょうか？

筆者：『シュリーマン直筆幕末日記――1865年の横浜と江戸』（横浜ユーラシア文化館・横浜市歴史博物館）という本が出ています。これによると、シュリーマンはドイツ人ですが旅行中の日記はフランス語と英語で書いていて、八王子訪問の部分はフランス語で書いています。彼は日本語までは出来なかったようですが、耳のセンスが良くて日本語の発音を聞き取ってところどころに記しています。八王子の綴りは**Hogiogi**となっています。フランス語ではhを発音しませんから「オジオジ」と呼んだか、あるいは「イギリス人六人と連れ立って行った」と述べているので、英語で「ホジオジ」と呼んだか、どちらかでしょう[2]。

ところで、『シュリーマン旅行記　清国・日本』（原題 *La China et le Japon au temp présent*）は、外国語で八王子を紹介したおそらく初めての本です。それまで何人かの外国人が八王子を訪問したことを日記に書いたことはありましたが、出版はしていません。シュリーマンはこの旅行記を、旅行から2年後の1867年にパリで出版します。当時のヨーロッパでは、旅行記は知識人として認められる仕事の一つでもありました[3]。シュリーマンはこの旅行記によって知識人社会に入り、本格的に考古学の仕事に乗り出していきます。彼が学者としてスタートする上で最初のステップになった著書のなかで八王子に一章を割き、しかも「とくに興味深かった」（同書、103頁）と記しているのですから、このエピソードを八王子のまちおこしに活かすと何か面白いことができるのではないかと考える次第です。

また、シュリーマンはこの旅行記で日本とヨーロッパの文化を比較していろいろと面白いことを書いていますが、一貫してヨーロッパ中心主義ではない、公平な視点から書いているのが、今日的に重要な点だと思

います。外国人が書いた幕末日本の記録というだけでなく、そうした文化人類学的な観点も含めて勉強する価値のある史料ではないでしょうか。

質問：八王子で絹産業が盛んになったのはなぜですか？
筆者：八王子でいつから養蚕が盛んになったのか正確なところは分かりませんが、江戸後期にはすでに「桑都」として知られるほどだったようです。シュリーマンが来た幕末の八王子で絹産業が盛んだった理由には、流通の関係もありました。今日最初に、長野や埼玉、群馬といった関東甲信の生糸が八王子に集約されて横浜に運ばれたという話をしましたが、たしかに地理的な位置を考えると八王子が中継地点として利便性に富む場所であったことがうかがえます。なかでも長野の生糸は品質が高かったようで、それに刺激されて八王子産の生糸もしだいに品質が向上したという話も聞いたことがあります。

なお、今年の11月に、東京富士美術館で「シュリーマンが見た風景――江戸末期の八王子」という講演会を行ないます[4]。どうして八王子では絹産業が盛んになったのかということを、八王子市史を執筆した専門家をお招きして解説していただく予定です。

質問：現在の八王子市の八日町の通りは、とても歴史を感じさせる老舗が多いのですが、どのような歴史がありますか？
筆者：じつはシュリーマンが八王子で実際に見学したのは、まさに八日町をはじめ甲州街道沿いの家々なんです。『シュリーマン旅行記　清国・日本』で彼はこう書いています。八王子では「道幅二十六メートル、約一マイル〔二キロメートル〕近くもつづく大通り」を見て回った」（同書、109頁）、と。当時の八王子は「八王子宿」といって大きな宿場町だったのですが、そのなかでも特に大きかったのが甲州街道沿い、今の八日町、横山町、八幡町の辺りでした。ここの道がちょうど1

マイル（約2キロメートル）なんですね。今も四車線ありますが、当時から道幅26メートルあったようです。江戸と信州（長野）を結ぶ甲州街道のなかで最大の宿場町の一つがこの八王子宿でした。

秋に八王子市内でシュリーマンの八王子訪問に関する展示会[5]をしようと思っているのですが、そこでは、江戸末期の地図などを参照しながら、シュリーマンがどこを歩いたのかも再現したいという話を今しているところです。

質問：シュリーマンが行ったビジネスは具体的にどのようなものだったのでしょうか？

筆者：シュリーマンの伝記によると、インディゴ（藍）の取引が多かったようです。そのほか、例えば、クリミア戦争の時には武器の売買もしています。クリミア戦争と言えば、イギリス軍の側でナイチンゲールが懸命に兵士を手当てしたことで知られていますが、このときロシアの側ではシュリーマンが商売していたんですね。このようにシュリーマンには商魂たくましいビジネスマンの側面もあって、いわばグローバル経済の真っただ中を生き抜いた人です。古代ギリシャ発掘の美談だけで終わらせるのではなく、こうしたトータルな視点で彼を捉えていくことも大事な視点ではないかと思っています[6]。

質問：シュリーマンがヨーロッパ中心主義的な見方に縛られていなかった背景には、どのような要因があったのでしょうか？　正規の学校影響を受けていなかったことが影響したんでしょうか？

筆者：非常に大事な質問で、これ自体研究テーマになるかもしれませんね。もちろん、正規の学校教育を受けていない分、現場主義というか、自分の眼で観察したものを元に考えるという姿勢はあっただろうと思います。この点を高く評価している学者もいます。あと、シュリーマンは何といっても苦労人で、アマチュアと言われてアカデミズムの歴史学者

たちから散々叩かれましたから、既成の権威には不信感や反発もあったでしょう。

ただし一方で、自分の研究を世に認めさせるためにはある種の権威も必要と思っていたふしもあり、自分の著作の序文をイギリスの総理大臣だったグラッドストンに書かせたりしています。イギリスでは伝統的に政治家もギリシャ・ローマの古典教養を持った人が多くて、グラッドストン自身、ホメーロス研究もしていた人なんです。シュリーマンはドイツの学界では認められなかったのですが、グラッドストンの力もあってイギリスの学界で認められて、その評価がドイツに逆輸入されるということになりました。そう考えると、シュリーマンはセルフ・プロデュースの達人だったと言えます。

秋に東京富士美術館では、先ほど予告した講演会のほかに、もう一つ講演会を開催したいと思っています。そこでは、ヨーロッパ政治思想史の専門家をお招きして、シュリーマンとグラッドストンとの交流についてもお聞きできればと考えているところです[7]。

2　ベルリン国立博物館群学芸員インタビュー（東京富士美術館とのコラボ）

2021年9月15日（水）放課後時間帯に、東京富士美術館で、「古代エジプト展」（主催：東京富士美術館・ベルリン国立博物館群エジプト館・朝日新聞社・東映、同年9月19日～2022年1月16日開催）のためドイツから来日していたベルリン国立博物館群エジプト館副館長オリヴィア・ツォーン博士に、学生チームが「シュリーマン・コレクション」に関するインタビューを行った。ベルリン国立博物館群がシュリーマン・コレクションを所蔵していることから取材を提案し、東京富士美術館と朝日新聞社との協力を得て実現した。

学生チームが事前に質問を考え、東京富士美術館と朝日新聞社を通して予めツォーン博士にお伝えした。当日は学生チームが対面でインタビューをした。質問のドイツ語訳、および当日の通訳は筆者が担当し、後日その音声記録を文字化したものをツォーン博士に校閲していただいた。また、インタビューの映像を学生チームが編集した字幕入り動画を、東京富士美術館主催のオンライン・イベント（第4節参照）で放映したほか、展示会「ドイツと八王子」（第5節参照）の会場でもスクリーンで常時放映した。

以下はインタビューのドイツ語版と日本語訳である。

学生のインタビューを受ける
ツォーン博士〔左端〕

ツォーン博士とインタビュー・チーム

ベルリン国立博物館群エジプト館副館長オリヴィア・ツォーン博士へのインタビュー（2021年9月15日）

Interview mit Dr. Olivia, stellvertretende Direktorin des Ägyptischen Museums Berlin (15. September 2021)[8]

（1）Vor etwa 150 Jahren besuchte der Archäologe Heinrich Schliemann *Hachioji,* wo sich das Tokyo Fuji Art Museum befindet. Anlässlich der Ausstellung im Nationalmuseum Berlin, das die Schliemann-Sammlung beherbergt, wären wir Ihnen dankbar, wenn Sie eine Botschaft an die Menschen in Hachioji senden könnten.

〔**質問１**〕 東京富士美術館のある八王子には、約150年前に考古学者ハインリヒ・シュリーマンが訪問しました。シュリーマン・コレクションを持つベルリン国立博物館群の展覧会開催に当たり、八王子市民へのメッセージをいただければ幸いです。

［**Antwort**］ Im Juni 1865 reiste Schliemann nach China und Japan und besuchte auf seiner Reise auch Hachioji. Er war sehr beeindruckt von der Landschaft und den Menschen hier. In Europa dieser Zeit war Rohseide ein wichtiger Importartikel und Heinrich Schliemann bezeichnete Hachioji als den Ort der Seide. Hier führte die Seidenstraße entlang. Schliemann hatte sich von seiner Kaufmannstätigkeit zurückgezogen, um ganz privat zu reisen und sich dann sechs Jahre später Ausgrabungen von Troja zu widmen.

Als ich hier ankam, und die schöne Landschaft in Hachiouji sah, kann ich es verstehen, dass Heinrich Schliemann sich hier sehr wohl gefühlt hat und sehr begeistert von dieser Landschaft war. Ich finde das Fuji Art Museum liegt in wunderschönen Hügeln und findet sich so schön in die Landschaft und das gesamten Umfeld ein. Ich bin nicht nur von dem Museum und von der Landschaft, sondern auch von der ausgesprochenen Freundlichkeit aller Menschen, die hier leben, sehr angetan. Dies gibt einem das Gefühl, nach Hause zu kommen und nicht nur auf Besuch zu sein.

〔**回答１**〕 1865年６月、中国と日本を旅したシュリーマンは、旅の途中で八王子も訪ね、ここの風景や人々にとても感銘を受けました。当時のヨーロッパでは生糸が重要な輸入品であり、ハインリッヒ・シュリーマンは八王子を「シルクの地」と呼びました。ここには絹の道が通っていたのです。シュリーマンは商人としての仕事を辞めて、まったく個人的に旅をしたのでした。そして６年後にはトロイの発掘に専念すること

になります。

私がここへ来て、八王子の美しい風景を見たとき、ハインリッヒ・シュリーマンがこの地をとても気に入って、その風景に熱中したことがよくわかりました。富士美術館は美しい丘の上にあり、風景や環境全体にとてもうまく溶け込んでいると思います。美術館や風景だけでなく、この地に住むすべての人々の大変友好的な態度にも非常に心をひかれました。単なる訪問ではなく、家に帰ってきたような気分にさせてくれます。

（**2**）Wie kam die Schliemann-Sammlung in die Staatlichen Museen zu Berlin?

〔**質問 2**〕 ベルリン国立博物館群に、シュリーマン・コレクションが収められた経緯を教えてください。

［**Antwort**］ Heinrich Schliemann hat ja viel in der heutigen Türkei gegraben und nicht um seine Ausgrabungsobjekte für sich selber zu behalten, sondern es war ihm wichtig, dass viele Menschen sie sehen können, und deshalb schenkte er seine gesamte Sammlung Berlin, der Hauptstadt Deutschlands. Und in Berlin gab es schon damals staatliche Museen, also die königlichen Museen, und es war der beste Ausstellungsort für die Objekte. Ausgestellt wurden sie zunächst im Kunstgewerbemuseum, dann später im Museum für Frühgeschichte, wo sie auch heute noch beherbergt werden. Sie waren ein Geschenk an die Stadt Berlin und an Deutschland, und damit handelt es sich um ein nationales Erbe.

〔**回答 2**〕 ハインリッヒ・シュリーマンは、現在のトルコで多くの発掘を行い、その発掘品を自分のものにするのではなく、多くの人に見てもらうことを重要視し、ドイツの首都ベルリンに全コレクションを寄贈し

ました。当時ベルリンにはすでに州立の博物館や王室の博物館があり、展示するには最適な場所だったのです。最初は装飾美術館に展示され、その後、現在の初期歴史博物館にも展示されています。ベルリンの街とドイツに贈られたものであり、国家遺産です。

（**3**）Was würden Sie sich wünschen, dass japanische Bürger und junge Menschen in dieser Ausstellung “Das alte Ägypten” besonders sehen?
〔**質問 3**〕 今回の「古代エジプト展」で日本の市民・若者にとくに見てほしい作品は何でしょうか？

［**Antwort**］ Ich glaube, alle Objekte sind sehr interessant, und finde die Kombination mit der Animation sehr schön kreativ. Diese hilft, die einzelnen Teile zu verstehen. Das ist es, glaube ich, was Spaß macht: einfach diese Geschichte mitzuerleben und dadurch die einzelnen Objekte vielleicht viel besser zu verstehen. Ich glaube, die Ausstellung zeichnet gerade diese Kombination aus. Ich denke, dass man sicherlich von allen Objekten begeistert sein wird, aber das ganz Wesentliche ist dieses lebendige Einfühlen.
〔**回答 3**〕 どの展示物もとても面白いですし、アニメーションとの組み合わせもとても素敵で創造的だと思います。これは個々の部分を理解するのに役立ちます。この物語を体験することで、個々の展示物をより深く理解できるようになることが、アニメーションの面白さだと思います。こうした組み合わせが、この展覧会を際立たせていると思います。確かにすべての展示物に啓発されますが、肝心なのはこの鮮やかな共感です。

（**4**）Welchen Einfluss hatte die altägyptische Kunst Ihrer Meinung

nach auf die deutsche Kunst?
〔**質問 4**〕 古代エジプト美術はドイツの美術や文学にどのような影響を与えたと思われますか？

［**Antwort**］ Die ägyptische Kunst hat seit dem 19. Jahrhundert einen großen Einfluss auf die deutsche Literatur und Kunst. Im 19. Jahrhundert wurde die ägyptische Kunst ganz neu entdeckt die Architektur, und auch die Literatur, denn die Ägypter hatten schon vielfältige Literatur. Und auch moderne Künstler wie Paul Klee oder Alberto Giacometti wurden von der Kunst beeinflusst. Sie haben ganz neue Kunstwerke erschaffen, nicht nur kopiert, sondern auch weitergedacht. Für die Literatur ist Thomas Mann zu nennen mit seinem Roman *Joseph und seine Brüder, der* von den originalen Objekten in Berliner Museum sehr begeistert war.
〔**回答 4**〕 エジプトの美術は、19世紀以降のドイツの文学や美術に大きな影響を与えてきました。19世紀になると、エジプトの美術は建築も含めて完全に再発見されました。エジプトにはすでに多様な文学があったので、文学も再発見されました。また、パウル・クレーやアルベルト・ジャコメッティのような現代の芸術家も、エジプト芸術から影響を受けています。彼らは全く新しい作品を作り、模倣するだけでなく、思考を先へ推し進めました。文学では、トーマス・マンが小説『ヨセフとその兄弟』を書いたことが挙げられます。彼はベルリン博物館にある現物の展示品を非常に熱心に見ていました。

（**5**）Was sind die Merkmale des Nationalmuseums in Berlin und Ihres Ägyptischen Museums? Was sind auch die betrieblichen Merkmale dieser Museen?
〔**質問 5**〕 ベルリン国立博物館群はどのような特徴のミュージアム運営

を心掛けていますか？

［**Antwort**］ Das ägyptische Museum ist ein Teil der großen Staatlichen Museen, die insgesamt aus 16 Sammlungen bestehen. Das Besonders daran ist, dass sie die Kulturgeschichte von der Frühzeit bis zur modernen Kunst abdecken, innerhalb dieser Museen können die Besucher über alle Zeitepochen etwas lernen. Auch die Museumsinsel ist ein kulturelles Erbe. Das ägyptische Museum zeichnet sich besonders durch die Amarna-Sammlung aus. Aber auch durch viele Objekte aus sogenannten Alten Reich, Opferkammern aus dem 3. Jahrtausend vor Christus. Das berühmteste Objekt ist natürlich die bunte Büste der Königin Nofretete.

Ich glaube das Besondere an den Staatlichen Museen ist, dass wir einen starken Bund haben und damit sehr große Ausstellungen machen können, auch durch die gemeinschaftliche Organisation. Wir können für ein großes Publikum Informationen über die Weltgeschichte präsentieren. Das ist ein ganz entscheidender Vorteil unserer großen zusammenhängenden Institution.

〔**回答 5**〕 エジプト博物館は、大規模な国立博物館の一部であり、合計16のコレクションから構成されています。その特徴は、初期から現代までの文化の歴史を網羅していることであり、これらの博物館では、すべての時代を学ぶことができます。博物館島は、世界遺産でもあります。エジプト博物館の特徴は、アマルナ・コレクションです。また、古王国時代と呼ばれる紀元前３千年紀の死者の部屋からも多くの品々が出土しています。最も有名な展示物は、もちろん、色鮮やかなネフェルティティ女王の胸像です。

国立博物館の特徴は、強力な提携関係にあり、共同組織であることから、非常に大きな展覧会を開催できることだと思います。世界史に関す

る情報を多くの人に紹介することができます。これは、私たちの大きなまとまりのある組織の非常に決定的な利点です。

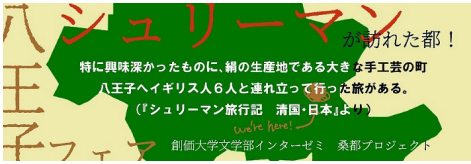
（**6**）Welchen Eindruck hatten Sie vom Tokyo Fuji Art Museum und anderen japanischen Museen während Ihres Aufenthalts?
〔**質問 6**〕 東京富士美術館や、日本のミュージアムについてどんな感想を持たれましたか？

［**Antwort**］ Das Tokyo Fuji Art Museum hat mich mit seiner Sammlung beindruckt, die ich sehen durfte. Ich bin überhaupt von allen Museen in Japan sehr angetan, die große Ausstellungen haben. Die Sammlungen sind sehr interessant, und die Museen sind didaktisch ganz wunderbar aufgebaut, auch das Edo Tokyo Museum hat mir gerade vom didaktischen Anspruch her sehr gut gefallen, Dass man sehr viel für Familie macht, für Kinder, Jugendliche, Studenten, finde ich sehr gut, und es ist auch alles sehr gut erklärt, natürlich viel in Japanisch, aber insbesondere beim Edo Tokyo Museum sind viele Erläuterungen in Deutsch, ich war sehr positiv überrascht. Ich finde die Ausstellungen in den japanischen Museen insgesamt sehr schön, man hat viel Platz, kann die Objekte sehr gut sehen. Alle Museen haben ihre ganz besonderen Eigenschaften und Ausstrahlung, das ist sehr schön.
〔**回答 6**〕 東京富士美術館では、そのコレクションを見ることができて感動しました。私は、日本で大きな展覧会を開催しているすべての美術館がとても好きです。コレクションは非常に興味深く、博物館は素晴らしい教育的構造を持っています。 特に江戸東京博物館は教育的観点から非常に気に入りました。 家族向け、子供向け、若者向け、学生向けに多くのことを行っているのは非常に良いことだと思いますし、すべて

のことが非常によく説明されています。もちろん日本語での説明も多いのですが、特に江戸東京博物館ではドイツ語での説明も多く、とても驚きました。日本の美術館の展示は、全体的にとても素晴らしいと思います。スペースが広く、展示物をよく見ることができます。どの美術館もそれぞれに特徴と魅力があって、とても素敵です。

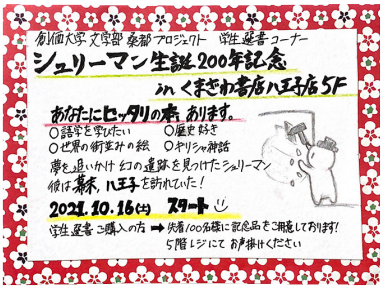
3　シュリーマン生誕200年記念学生選書（くまざわ書店八王子店とのコラボ）

2021年10月16日（土）から、くまざわ書店八王子店５階フロアにて、「シュリーマン生誕200年記念学生選書コーナー」を開催した（第１期：2021年12月31日まで）。同書店員の助言を受けながら学生が本を選定し、シュリーマンの著書以外にも、古代ギリシャ、考古学、幕末、語学、さらにはドイツやギリシャの料理に関するものなど、計44点を揃えた。内容を紹介するポップや、店内に貼るポスター等のデザインをすべて学生が手がけた。ちょうど同じフロアで開催中の地域出版・揺籃社を中心とする八王子関連ブックフェアと併せ、「八王子」を特集する大きなコーナーとなった。



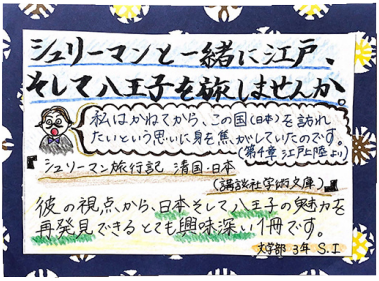
第１期パネル：中央部には「桑都」を象徴して、八王子市の形を模した桑の葉がデザインしてある

◀第１期チラシ



第１期ポップ：選書コーナーのコンセプト

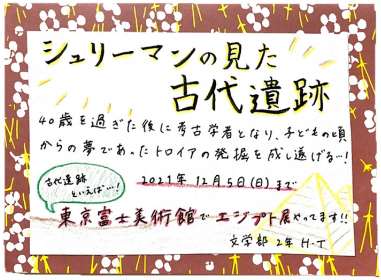
◀第１期：学生作成のパネルとポップ



第１期ポップ：『シュリーマン旅行記
清国・日本』

第１期ポップ：『世界一よくわかる幕末
維新』

第１期ポップ：『〇〇語のしくみ』
シリーズ



第１期ポップ：『トロイア戦争』
『トロイアの真実』

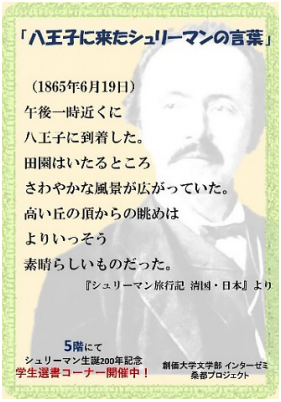
第１期の選書リストは以下の通りである（☆印＝ポップを付けた書籍、◎印＝よく売れた、○印＝最低１冊売れた。売行きは2021年末段階の情報。ポップの有無と、売行きの有無との間にある程度の相関性がうかがえる）。

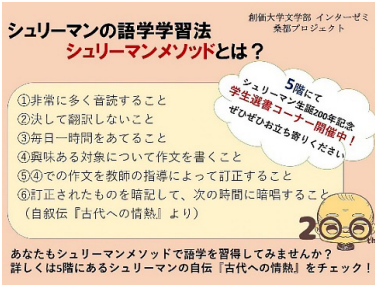
第１期リスト

タイトル	著者・訳者	出版社	ポップ	売行き
古代への情熱　シュリーマン自伝	村田数之亮＝訳	岩波文庫	☆	◎
古代への情熱　シュリーマン自伝	関楠生＝訳	新潮文庫		○
シュリーマン旅行記　清国・日本	H. シュリーマン	講談社学術文庫	☆	◎
世界一よくわかる幕末維新	山村竜也	祥伝社黄金文庫	☆	○
トロイアの女たち	エウリピデス	論創社		
古代ギリシャのリアル	藤村シシン	実業之日本社		○
トロイア戦争　歴史・文学・考古学	エリック・H・クライン	白水社		○
世界を変えた人たち365　生きる力を育てる新時代の伝記	田島信元＝監修	永岡書店		
世界一よくわかる！　ギリシャ神話キャラクター辞典	オード・ゴエミンヌ	グラフィック社		○
旅の絵本　1	安野光雅	福音館書店		
旅の絵本　4	安野光雅	福音館書店		
旅の絵本　8	安野光雅	福音館書店		
絵と物語でたどる古代史　2　ギリシア	ロイ・バレル	晶文社	☆	○
ギリシャのごはん　うちで楽しむ、とっておきレシピ65	アナグノストゥ直子	イカロス出版	☆	

タイトル	著者・訳者	出版社	ポップ	売行き
野田シェフのドイツ料理	野田浩資	里文出版		
「教養」として身につけておきたい　戦争と経済の本質	加谷珪一	総合法令出版	☆	
それでも僕は夢を見る	水野敬也	文響社		
トロイの木馬	江上剛	朝日文庫		
遺跡発掘師は笑わない　ほうらいの海翡翠	桑原水菜	角川文庫		
クリスマス・キャロル	ディケンズ	新潮文庫	☆	○
イリアス　上	ホメロス	岩波文庫	☆	○
イリアス　下	ホメロス	岩波文庫		○
シュリーマン・黄金発掘の夢「知の再発見」双書　76	エルヴェ・デュシエーヌ	創元社		◎
ロシア語のしくみ	黒田龍之助	白水社	☆	
スペイン語のしくみ	岡本信照	白水社		
フランス語のしくみ	佐藤康	白水社		
ドイツ語のしくみ	清野智昭	白水社		
イタリア語のしくみ	野里紳一郎	白水社		
オランダ語のしくみ	清水誠	白水社		
トルコ語のしくみ	吉村大樹	白水社		
デンマーク語のしくみ	鈴木雅子	白水社		
英語のしくみ	関山健治	白水社		
古典ギリシア語のしくみ	植田かおり	白水社		○
ラテン語のしくみ	小倉博行	白水社		
ギリシア考古学の父シュリーマン　ティリンス遺跡原画の全貌	天理大学附属天理参考館＝編	山川出版社		◎

タイトル	著者・訳者	出版社	ポップ	売行き
トロイアの真実　アナトリアの発掘現場からシュリーマンの実像を踏査する	大村幸弘	山川出版社	☆	○
エーゲ　永遠回帰の海	立花隆	ちくま文庫		○
ギリシア神話の光と影　アキレウスとオデュッセウス	吉田敦彦	青土社		
オデュッセウスの冒険	吉田敦彦	青土社		
ギリシア文明	フランソワ・シャムー	論創社		
中動態の世界　意志と責任の考古学	國分功一郎	医学書院	☆	◎
ギリシア人の物語１ 民主政のはじまり	塩野七生	新潮社		
ギリシア人の物語２ 民主政の成熟と崩壊	塩野七生	新潮社		
ギリシア人の物語３ 新しき力	塩野七生	新潮社		





第１期ポスター：シュリーマンの語学学習法

◀第１期ポスター：シュリーマンの言葉

第１期の好評を受けて2022年１月２日（日）から第２期が開始した（１月現在開催中)。以下は１月６日（木）に創価大学ホームページに掲載された学生チームによるアピールである。

第一期ではシュリーマンの著作以外に、彼の勉強した語学や考古学に関する本を中心に選書しましたが、第二期では新たに14冊を入れ替えます！シュリーマンの生きた時代に関する世界史や日本史など、様々な切り口でアプローチしました。その一部をご紹介しますと、

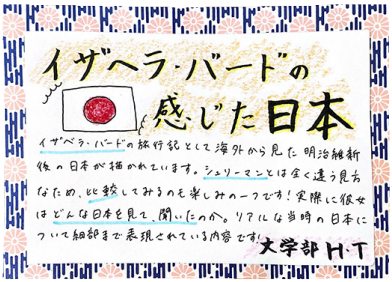
- 『ナイチンゲール神話と真実（みすず書房)』

シュリーマンが遺跡発掘に先立つビジネスマン時代に「クリミア戦争」に加担していたことから、この戦争の負傷者を救済していた「ナイチンゲール」を取り上げました。

- 『イザベラ・バードの日本紀行（講談社学術文庫)』

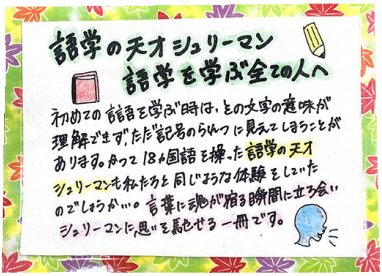
シュリーマンの様に日本を訪れ、旅行記を執筆した女性「イザベラ・バード」に焦点を当て、外国から日本はどの様に見られていたかを新たに発見できる日本紀行を選書しました。

選書に際して書店員の方からは、学生作成のポップについて『コンテクストがとてもよく伝わっていますので、読者の琴線にも響くのではないかと思われます』とのコメントをいただきました。ぜひ書店にお越しください。



第 2 期ポップ：『イザベラ・バードの日本紀行』

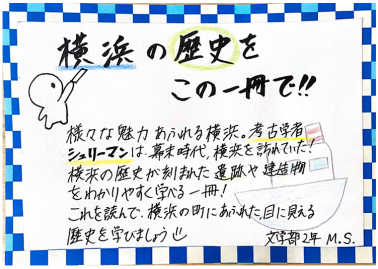
◀第 2 期の追加でポップは計 20 点近くに



第 2 期ポップ：『言葉の魂の哲学』

第 2 期ポップ：『トロイア戦争の三人の英雄たち』

第 2 期ポップ：『ナイチンゲール神話と真実』



第 2 期ポップ：『横浜　旅行ガイドにないアジアを歩く』

第２期での新規追加リストは以下の通りである（☆印＝ポップを付けた書籍。本稿が第２期の開始からまもない１月中旬執筆のため、売行きの欄はつけていない）。

第２期リスト

タイトル	著者・訳者	出版社	ポップ
せかい伝記図書館　11　ナイチンゲール　シュリーマン　パスツール	子ども文化研究所＝監修	いずみ書房	
ナイチンゲール神話と真実	ヒュー・スモール	みすず書房	☆
ポケットに外国語を	黒田龍之助	ちくま文庫	
言葉の魂の哲学	古田徹也	講談社選書メチエ	☆
イザベラ・バードの日本紀行　上	イザベラ・バード	講談社学術文庫	☆
イザベラ・バードの日本紀行　下	イザベラ・バード	講談社学術文庫	
日本は外国人にどう見られていたか	「ニッポン再発見」倶楽部	知的生きかた文庫	
ヘシオドス　神統記	ヘシオドス	岩波文庫	☆
ギリシア神話を知っていますか	阿刀田高	新潮社	
ギリシア・ローマ神話　付　インド・北欧神話	ブルフィンチ	岩波文庫	
トロイア戦争の三人の英雄たち　アキレウスとアイアスとオデッセウス	川井万里子	春風社	☆
横浜　旅行ガイドにないアジアを歩く	鈴木晶	梨の木舎	☆
シュリーマン［新装版］　トロイア発掘者の生涯	エーミール・ルートヴィヒ	白水社	
クリミア戦争　上	オーランドー・ファイジズ	白水社	☆

4　シュリーマン関連講演会（東京富士美術館とのコラボ）

2021年10月17日（日）14：00～15：30、および11月7日（日）14：00～15：30に、東京富士美術館主催（桑都プロジェクト協力）により、研究者を招いてのシュリーマン関連講演会をオンラインで開催した。いずれの回でも、学生チームの編集による動画「ベルリン国立博物館群エジプト館副館長オリヴィア・ツォーン博士へのインタビュー」（第2節参照）を放映した。とくに2回目の講演会は、八王子市内での展示「ドイツと八王子～シュリーマンと肥沼信次～」（第5節参照）の会場で学生チームがライブビューイングを行った。

講演会の概要は以下の通りである。

学生の作成による字幕付き動画

（1）古代エジプト展開催記念講演会「古代への情熱――新たなシュリーマン像を求めて」（2021年10月17日）

講師は堤林剣氏（慶應義塾大学法学部教授）と堤林恵氏（政治思想史研究者）および筆者が務めた。堤林剣氏・恵氏は共著に『「オピニオン」の政治思想史――国家を問い直す』（岩波書店）があり、近代ヨーロッパ史に造詣が深い。講演会では、最初に東京富士美術館の学芸員から開催中の「古代エ

ジプト展」と「発掘！古代遺跡の写真展」について紹介があったあと、筆者が「古代への情熱～新たなシュリーマン像を求めて～」、堤林剣氏・恵氏が「時に大胆に、そして常に誠実であれ～知を愛する者《アマチュア》の底力～」と題して講演を行った。講演会には120名近い参加者があった。以下は東京富士美術館のホームページに掲載された案内文である。

明年１月は考古学者シュリーマンの生誕200周年に当たります。独学で十数か国語を習得、ビジネスで築いた巨万の富を用いて、伝説の「トロイ遺跡」を発掘したというエピソードの持ち主ですが、近年は新しい観点からのシュリーマン研究が始まっています。彼は幕末の日本を訪れた旅行家でもあり、新聞雑誌等あらゆる媒体を駆使して自説を広めるジャーナリスト的側面もありました。賛否両論を呼んだ彼の発見を支援したのは、英国の首相を４度務めた政治家グラッドストンでした。本講演会では、シュリーマンの日記や旅行記、グラッドストンとの交流をひもときつつ、新たなシュリーマン像に迫ります。開催中の「古代エジプト展」および「発掘！古代遺跡の写真展」についても紹介いたします。

（2）シュリーマン生誕200周年記念講演会「シュリーマンがみた風景――江戸末期の八王子」（2021年11月７日）

講師は神立孝一氏（創価大学副学長・経済学部教授）と筆者が務めた。神立氏は『新・八王子市史　近世編２』（八王子市市史編纂委員会）の執筆者の一人であり、同書の中でシュリーマンの八王子訪問についても論及している。講演会では、最初に東京富士美術館の学芸員から開催中の「古代エジプト展」と「発掘！古代遺跡の写真展」について紹介があったあと、筆者が「シュリーマンの見た風景～その生涯と日本旅行～」、神立氏が「シュリーマンと八王子」と題して講演を行った。講演会には150名近い参加者があった。以下は東京富士美術館のホームページに掲載された案内文である。

明年（2022年）1月、考古学者シュリーマンは生誕200周年を迎えます。独学で十数か国語を習得、ビジネスで築いた巨万の富を用いて、伝説の「トロイ遺跡」を発掘したというエピソードの持ち主ですが、遺跡を発掘する前、彼は幕末の日本を訪れ、興味深い日記を綴っています。本講演会では、シュリーマンの日記や旅行記をひもときつつ、東京富士美術館がある「八王子」に焦点を当て、江戸末期、シュリーマンが視察した養蚕業の一大拠点であった八王子とその周辺地域の様子に迫ります。開催中の「古代エジプト展」および「発掘！古代遺跡の写真展」についても紹介いたします。

5　展示「ドイツと八王子」（Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会とのコラボ）

2021年11月3日（火）から14日（日）にかけての全12日間、八王子市内の施設「まちなかギャラリー」（まちなか休憩所八王子宿2階）で、「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」とコラボして「ドイツと八王子～シュリーマンと肥沼信次～」展を開催した。これは2021年が「日独交流160周年」に当たることから、ドイツと八王子との交流史における先人である二人の人物に光を当てる試みである。開催期間中、とくに平日は学生チームが授業もあって受付を担当できないため、「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」の方々が午前午後、シフト体制を組んで担当してくださった。また、11月6日（土）、13日（土）の午前午後、同会の方々がシュリーマンの生涯と肥沼信次の生涯の紙芝居を上演された（シュリーマンの紙芝居は初公開。その中ではシュリーマンの八王子訪問についても描かれた）。

同展には石森孝志八王子市長以下、延べ約360名の来場者があった。

展示項目は以下の通りである。

1）挨拶

2）シュリーマンの生涯

3）シュリーマンと「桑都」八王子

4）桑都プロジェクトの活動報告

①くまざわ書店チーム

②デザインチーム

③東京富士美術館チーム

④シュリーまんチーム

⑤読書カフェチーム

⑥学生ライター部チーム

5）総括　世界市民 ―from 八王子 to Hogiogi―

6）「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」による展示：

「誰かのためにいきてこそ…　ドイツ人の命を救ったDr. 肥沼」

桑都プロジェクトのシュリーマン関連展示

「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」の展示

以下、展示内容のうち、桑都プロジェクト作成による１～５の内容（３、４は一部)、および作成に当たり参照した文献の一覧を紹介する。

１）挨拶

本年は「日独交流160周年」の佳節に当たります。今日、両国外交の開始とされる日本とプロイセンの修好通商条約の締結は、1861年１月24日のことでした。

このたび、両国交流の一層の進展を願い、「ドイツと八王子―シュリーマン＆肥沼信次―」と題する展示を企画しました。これは、交流の先人であり八王子と縁のある二人の人物に光を当てる初の試みです。

ハインリヒ・シュリーマン（1822～1890）は、伝説の「トロイ遺跡」の発掘で知られるドイツの考古学者です。彼はこの発掘に先立つ６年前の1865年に日本を訪れ、著書『清国と日本』のなかで「八王子」について一章を割きました。当時、八王子は絹の生産地として有名で、シュリーマンはその生産の現場を一目見たかったようです。

明年１月６日は「シュリーマン生誕200周年」を迎えます。本展示ではそれにちなんで学生が行った地域活動も紹介しています。

肥沼信次（1908～1946）は、八王子出身の医師で、1937年に日本政府の国費留学生として渡独しました。当地で研究を重ね、第二次世界大戦後にはヴリーツェンの伝染病医療センター初代所長としてチフスやコレラの疾病対策に従事しますが、チフスに罹患し1946年に没しました。今日でもヴリーツェンの市民に深く敬愛されています。

ドイツ出身で八王子へ来たシュリーマンと、八王子からドイツへ渡った肥沼信次。活躍した時代と分野は異なりますが、二人には大きな共通点があります。それは、優れた語学力によって国境を超えた活躍をしながら、同時に、ローカルな場所に生きる人々の生活を何よりも重視した点です。

本展示がドイツと八王子をつないだ偉大な先人に思いを馳せ、グローバル化する現代社会における生き方を考える一助になれば、これに過ぎる喜びはありません。

最後に、共催としてご尽力くださったDr.肥沼の偉業を後世に伝える会の皆様と、多大なご協力を賜った大学コンソーシアム八王子に心から深く感謝申し上げます。

2）シュリーマンの生涯

ハインリヒ・シュリーマンは1822年1月6日、現在のドイツ北部に位置するメクレンブルク＝シュヴェリーン大公国のノイブコウに生まれました。

幼い時に母親を失い、父親も失職したため、貧しい少年時代を送りました。雑貨屋の見習になりますが、健康を害して解雇されました。1841年（19歳）、アメリカに渡ろうとするも船が難破し、オランダのアムステルダムで貿易会社の事務員になりました。

仕事のかたわら、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語など十数か国語を独学で習得します。この時彼が編み出した語学勉強法は今日「シュリーマン・メソッド」と呼ばれています。

1844年（22歳）に大手貿易会社の書記・帳簿係として採用されると、持ち前の語学力と商才を活かして実績を上げます。2年後（24歳）にはロシアのサンクトペテルブルクに自分の商社を設立、主にインディゴ（藍）の取引で大きな富を築きました。

1864年（42歳）にビジネスを引退し、翌年（43歳）にかけて世界旅行をし、インドや中国（清国）、日本を訪問します。1866年（44歳）にフランスのソルボンヌ大学の聴講生となり言語学や考古学を学びました。

1867年（45歳）に最初の著作である『清国と日本』を、1869年（47歳）に最初の考古学的著作『イタカ、ペロポネソス、トロイ』を出版し、この2冊によりドイツのロストック大学から博士号を取得しました。

1871年（49歳）にトルコのヒッサリク丘で「トロイア」発掘を開始し、2年後（51歳）の第三回発掘で膨大な金・銀・銅製品を発見、さらに1876年（54歳）にはミケーネ発掘を行い、ふたたび膨大な金製品を発見しました。

これらの発掘により、古代ギリシャ文明よりも約1000年前にエーゲ海沿岸に高度な文明が存在していたことを証明し、考古学界に一大センセーションを巻き起こしました。

1890年（68歳）12月26日、イタリアのナポリで昏倒し、そのまま死去しました。

3）シュリーマンと「桑都」八王子

1865年、43歳のシュリーマンは世界旅行をし、6月1日から9月2日までの約三か月間、幕末（慶応元年）の日本に滞在しました。

著書『清国と日本』（1869年）では、「私はかねてから、この国（日本）を訪れたいという思いに身を焦がしていたのである」と語っています。

横浜や江戸とともに八王子に一章を割き、「とくに興味深かったものに、絹の生産地である大きな手工芸の町八王子（Hogiogi）へイギリス人六人と連れ立って行った旅がある」と記しています。

当時、ヨーロッパでは蚕の病気である微粒子病が流行し、生糸産業が大打撃を受けていたため、日本の輸出品の約73％を生糸が占めていました。武蔵国・相模国各地で生産された生糸は八王子へ運ばれ、「八王子糸」と称されて横浜から輸出されました。

また、外国人は横浜港から10里（約40km）内しか旅行を許されず、八王子はその区域にある生糸の産地として欧米人がしばしば訪れる場所でした。

語学の達人であったシュリーマンは、日記をドイツ語・フランス語・英語の三か国語で書き、それを基にした著書『清国と日本』をパリで出版しました。そして1869年に他の著書とともにドイツのロストック大学に提出し、博士号を取得しています。シュリーマンは八王子を西洋に紹介する本を書いた最初の人であると言ってよいでしょう。

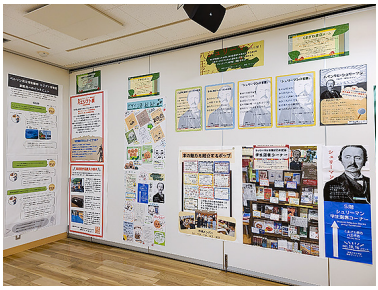
本展示では、シュリーマンが八王子を訪問した際の日記（原文フランス語）と、それに対応する『清国・日本』（原文フランス語）の記述を紹介します。シュリーマンとともに幕末の「桑都」八王子を旅してみてください。

シュリーマンの八王子訪問記を紹介する模造紙７枚中の１枚

古地図も使い、シュリーマンが歩いた八王子の道を推測

4）桑都プロジェクトの活動報告

ここでは全体写真と、各チームの概要を記したパネルのみ紹介する。



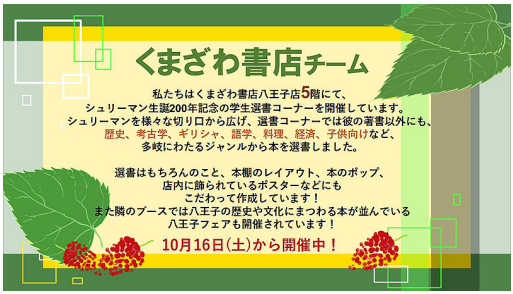
右から①くまざわ書店チーム、②デザインチーム、③東京富士美術館チーム

④シュリーまんチーム

右から⑤読書カフェチーム、⑥学生ライター部チーム

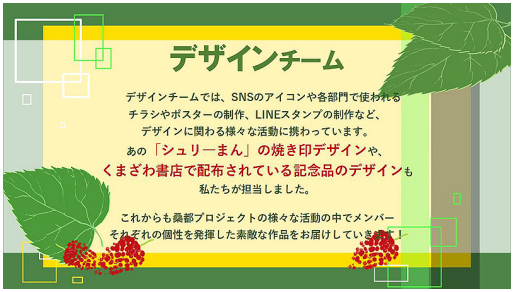
【概要パネルとその文章】

① くまざわ書店チーム



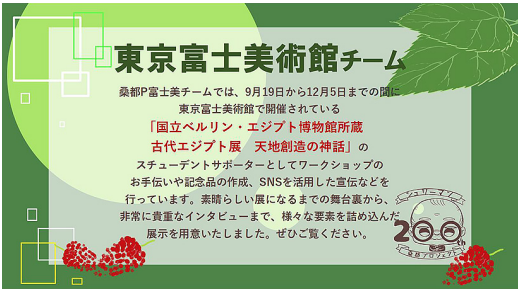
私たちはくまざわ書店八王子店５階にて、シュリーマン生誕200年記念の学生選書コーナーを開催しています。シュリーマンを様々な切り口から広げ、選書コーナーでは彼の著書以外にも、歴史、考古学、ギリシャ、語学、料理、経済、子供向けなど、多岐にわたるジャンルから本を選書しました。選書はもちろんのこと、本棚のレイアウト、本のポップ、店内に飾られているポスターなどにもこだわって作成しています！また隣のブースでは八王子の歴史や文化にまつわる本が並んでいる八王子フェアも開催されています！

② デザインチーム



デザインチームでは、SNSのアイコンや各部門で使われるチラシやポスターの制作、LINEスタンプの制作など、デザインに関わる様々な活動に携わっています。あの「シュリーまん」の焼き印デザインや、くまざわ書店で配布されている記念品のデザインも私たちが担当しました。これからも桑都プロジェクトの様々な活動の中でメンバーそれぞれの個性を発揮した素敵な作品をお届けしていきます！

③ 東京富士美術館チーム



桑都Ｐ富士美チームでは、９月19日から12月５日までの間に東京富士美術館で開催されている「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵古代エジプト展　天地創造の神話」のスチューデントサポーターとしてワークショップのお手伝いや記念品の作成、SNSを活用した宣伝などを行っています。素晴らしい展になるまでの舞台裏から、非常に貴重なインタビューまで、様々な要素を詰め込んだ展示を用意いたしました。ぜひご覧ください。

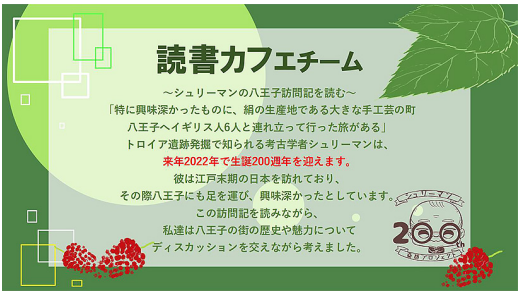
④ シュリーまんチーム

～都まんじゅう×シュリーマン～

私たちは、つるや製菓都まんじゅうとのコラボ企画をおこなっていま

す。ドイツの考古学者シュリーマンは来年2022年１月に生誕200周年を迎えます。そこで、生誕時期に合わせて地域おこしのシンボルである「シュリーまん」を販売し、八王子地域の活性化を目指しています。シュリーマンをモチーフにしたイラストの焼印入り都まんじゅう通称「シュリーまん」は2021年10月１日～2022年２月15日まで期間限定で販売しております。

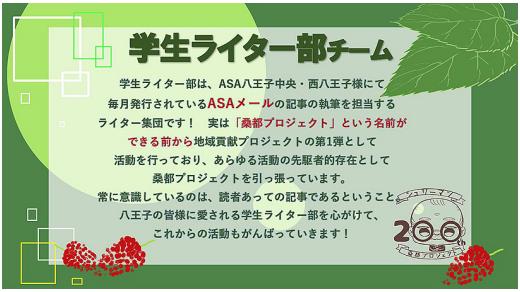
⑤ 読書カフェチーム



～シュリーマンの八王子訪問記を読む～

「特に興味深かったものに、絹の生産地である大きな手工芸の町八王子へイギリス人６人と連れ立って行った旅がある」トロイア遺跡発掘で知られる考古学者シュリーマンは、来年2022年で生誕200週年を迎えます。彼は江戸末期の日本を訪れており、その際八王子にも足を運び、興味深かったとしています。この訪問記を読みながら、私達は八王子の街の歴史や魅力についてディスカッションを交えながら考えました。

⑥ 学生ライター部チーム



学生ライター部は、ASA八王子中央・西八王子様にて毎月発行されているASAメールの記事の執筆を担当するライター集団です！　実は「桑都プロジェクト」という名前ができる前から地域貢献プロジェクトの第１弾として活動を行っており、あらゆる活動の先駆者的存在として桑都プロジェクトを引っ張っています。常に意識しているのは、読者あっての記事であるということ。八王子の皆様に愛される学生ライター部を心がけて、これからの活動もがんばっていきます！

5）総括　世界市民 ―From八王子 to Hogiogi―

これまでシュリーマンと言えば自伝『古代への情熱』が有名でした。そこには、彼が少年時代に「トロイア」発掘を志し、そのためにビジネスマンとして巨万の富を築き、40代になって長年の夢を実現したというエピソードが書かれています。

近年の研究によると、少年時代のエピソードは多分に晩年のシュリーマンによる創作であったようです。アマチュア出身の彼の発掘には大学教授たちから批判が寄せられていたため、彼は自分の情熱の深さを自伝で力説する必要があったのでしょう。

しかし、自伝に脚色が含まれていたとしても、シュリーマンが人一倍

の努力を重ねて語学を習得し、伝説とされていた「トロイア」の発掘に後半生のすべてを捧げて、考古学の常識を覆す大発見をしたという事実に変わりはありません。

平均寿命が今よりも短い時代に、40代半ばから新しい分野に飛び込んで挑戦しつづけたその生涯は、「人生100年時代の模範」とも言えるでしょう。

また、グローバル化が進み、多様性がキーワードとなった21世紀の今日、シュリーマンは「世界市民」の先駆者としても注目に値します。それは単に彼が十数か国語を操る語学の達人だったからではありません。

彼の日本旅行記は、偏見のない目で異文化を観察・描写したことで今日高く評価されています。自分の文化を絶対視せず、異文化から積極的に学ぼうとする姿勢は、これからの時代ますます求められることでしょう。

シュリーマンはドイツから八王子（Hogiogi）に来た世界市民でした。では、八王子からドイツに渡った世界市民は誰か？　第二次世界大戦後のドイツで医療に従事し、自ら感染症で亡くなった肥沼信次博士の名前を私たちは忘れることができません。

コロナ禍で先行きが不透明な今、感染症が一刻も早く終息して八王子と世界との交流がふたたび活発化することを願い、「Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会」とコラボして本展示を開催する運びとなりました。同会の展示を併せてご鑑賞いただければ幸いです。

製作　創価大学文学部「桑都プロジェクト」学生チーム
プロジェクト監督　伊藤貴雄・西川ハンナ

注

1　募集文の作成に当たっては、遠山義孝氏（明治大学名誉教授）の論考「世界市民的見地より見たシュリーマン――幕末の日本に来訪する迄の足取り」（明治大学教養論集519、2016年、159−187頁）が大変参考になった。

2　『シュリーマン直筆幕末日記』の訳者まえがき（福原庸子執筆）によると、シュリーマンの日本滞在中の日記は、備忘録として書かれたバージョン（Dairy 6）と、出版を意図して清書したバージョン（Dairy 7）との2種類あり、いずれもギリシャの在アテネ米国古典学研究所〔ASCSA〕でオンライン閲覧が可能である。筆者がDairy 6を確認したところ、そこでの八王子の表記はすべて**Hagiogi**（ハジオジ）となっていることが分かった。シュリーマンが八王子の表記をHagiogiからHogiogiに変更した理由は不明である。

3　シュリーマンは1869年に、清国・日本旅行記を、考古学に関する論文とともにドイツのロストック大学に提出して博士号を取得している。

4　第4節参照。

5　第5節参照。

6　第3節で触れる「学生選書コーナー」では、学生チームがクリミア戦争関連の書籍も取り上げ、推薦のポップを作成した。

7　第4節参照。

8　Am Mittwoch, den 15. September 2021, führte das Studententeam nach Schulschluss im Tokyo Fuji Art Museum ein Gespräch über die Schliemann-Sammlung mit Dr. Olivia Zorn, der stellvertretenden Direktorin des Ägyptischen Museums und Papyrussammlung der Staatlichen Museen zu Berlin, die anlässlich der Ausstellung “Ancient Egypt”（organisiert vom Tokyo Fuji Art Museum, dem Ägyptischen Museum Berlin, der Asahi Shimbun und Toei Company LTD., 19. September-16. Januar 2022）aus Deutschland nach Japan kam.

Ein Studententeam bereitete im Vorfeld Fragen vor und übermittelte sie Dr. Zorn über das Tokyo Fuji Art Museum und die Zeitung Asahi Shimbun. Am Tag des Besuchs führte das Studententeam das Interview persönlich durch. Ich war für die Übersetzung der Fragen ins Deutsche und das Dolmetschen an diesem Tag zuständig, und später überprüfte Dr. Zorn die Transkription der Tonaufnahme. Ein untertiteltes Video des Interviews, das vom Studententeam bearbeitet wurde, wurde in einer vom Tokyo Fuji Art Museum organisierten Online-Veranstaltung gezeigt und war auch auf einer Leinwand in der Ausstellung “Deutschland und Hachioji” zu sehen. Im Folgenden finden Sie die deutsche Fassung und die japanische Übersetzung des Interviews.

参考文献（50音順）

・シュリーマン、H『古代への情熱　シュリーマン自伝』村田数之亮訳、岩波文庫
・Schliemann, H. und Schliemann, S. *Heinrich Schliemann's Selbstbiografie*, Dresden: Saxoniabuch
・シュリーマン、H『シュリーマン旅行記　清国・日本』石井和子訳、講談社学術文庫
・Schliemann, H. *La China et le Japon au temp présent*, Paris: Librairie Centrale
・デュシエーヌ、H『シュリーマン　黄金発掘の夢』青柳正規訳、創元社
・天理大学附属天理参考館『ギリシア考古学の父シュリーマン』山川出版社
・遠山義孝「世界市民的見地より見たシュリーマン―幕末の日本に来訪する迄の足取り―」明治大学教養論集519
・トレイル、D『シュリーマン　黄金と偽りのトロイ』周藤芳幸・澤田典子・北村陽子訳、青木書店
・中町史編集委員会『中町百周年記念　中町史』
・八王子市郷土資料館『八王子の絵図Ⅰ』（平成23年度特別展資料集）
・八王子市郷土資料館『幕末の八王子　西洋との接触』
・八王子市郷土資料館『八王子宿のうつりかわり』
・八王子市市史編集委員会『新八王子市史　通史編４　近世（下）』
・ムアヘッド、C『トロイアの秘宝　その運命とシュリーマンの生涯』芝優子訳、角川書店
・横浜ユーラシア文化館・横浜市歴史博物館『シュリーマン直筆幕末日記　1865年の横浜と江戸』

付記：本稿で紹介したプロジェクトでは、大学コンソーシアム八王子、創価大学地域・産学連携センター、創価大学図書館、東京富士美術館、くまざわ書店八王子店、Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会の皆様に特にお世話になった。この場を借りて篤く御礼申し上げる。